

テレビドラマ「佐賀のがばいばあちゃん」を見ていたら、涙の向こうに自分の熊本のばあちゃんの姿が浮かんで来た。小学生のころ聞いた祖母の話は今も心の深い所で生きている。

「上すらり中びつたりと下一寸。下んの下等は後を構わず」。部屋に入っすまなどを開けたままにしているとよく言われた。「一日に三度わが身を省

「がばいばあちゃん」

みる」「七度口おのりを疑って人を疑え」「不言実行」「天知る地知る我知る人知る」
—明治生まれのおばあちゃん

シロタナ



木立のシグナル

んの話は漢語が多く人倫を説くという趣だが、ちっとも説教臭くなかった。

麦踏み、サツマイモの苗植え、布団綿の入れ替えなどを手伝う合間にひよいひよいと出てくる解説付き話を聞くのが楽しみだった。

「着る物は継ぎが当たっていても清潔なら恥ずかしいことではないよ」とも。貧しい時代だった。しかし、人間にはお金より大切なものがあると日本の庶民は知っていた。やせ我慢だけではなかった。

それぞれの人の心の中の「がばいばあちゃん」。殺伐としたニュースが続く昨今、おばあちゃんの役割は小さくないと再確認。(郁)